

1999. 12. 30

祈り～ バッハ「ロ短調ミサ」より *Benedictus*

誰に対する祈りなのか。

祈りというものを考えた時、私達は誰に向かってそれを行うのだろうか。神に向かってか、星に向かってか、それとも絶対的な存在である何か、に向かってか…。いや、「生ける者達」に向かってだ。人間の力は極めて微小であり、自然の脅威、無作為な宇宙の運動、さらには、人間同士の関係においてさえ、私達は無力といってもいいほどだ。しかし、未来を作る者として、生ける者達以外の何物があるのか。

神の御業（みわざ）に全てを委ねて生きると、ある人々は言うかもしれない。しかし、それとても、生きて現実の世界を動かす、もしくは未来を作るのは、生ける者達ではないか。神そのものの意思が、自然を動かし、宇宙を動かすにせよ、それを受けとめ、そこから引き出したものを未来へとつなげるのは「生ける者達」ではないだろうか。いや、神の意志を受けとめるという、まさにそのこととて、生ける者達の意思と叡智なくして、どうしてできるものか。

それ故に、私の祈りは常に「生ける者達」に向けられる。

逝ける人の死を悼む心——それは逝ける人を惜しむ心、逝ける人との別れを哀しむ心であると同時に、残された我々が祈る心でもある。ある僧が言っていたが、死にまつわる様々な儀式に臨む時というものは、生ける我々が死を考える時であり、それはすなわち己の生について考える時である、という。

逝ける人から様々な形で、その人の生前にせよ、その人の死後にせよ、得たものを引き継ぐ事のできるのは、我々「生きてある者」なのだ。

この *Benedictus* の中には、*Domini* という言葉が繰り返される。これは、まさしく「主」という意味で使われている。流れるようなフルートの音色に乗ってテノールが歌い上げるこの部分は、このミサ曲の中でも極めて美しく天国的な部分である。その中に込められた祈りの中に、私は、生ある者達への切々とした訴えを聞き取る。

私達は、互いに傷つけ合うことも、愛し合う事も、そしてこの星を掃き溜めと化すこともできる…。皮肉にも、たとえそれが、いわゆる「神の意志」に背こうとも、やってのけることができる。

私は、ある時、自然の中で、次のような声を聞いたように思った。

「人間とは、あらゆる生物の中で、最も幸福に近づくことのできる『可能性』を持った生物だ」

と…。

その『可能性』を私達はどこまで生かしていけるのだろうか。